

### 〈追悼文〉 院生のころ

森田, 孟進

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

42

(終了ページ / End Page)

43

(発行年 / Year)

1995-02-24

# 院生のころ

森田 孟進

1958年4月、東京都立大学人文学部に入学すると、ただちに、国語学の平山輝男先生に呼ばれた。先生は私が沖縄のどの地方の出身であるかなどについてたづねられたが、私が沖縄方言の訛りをもはや保持していず、沖縄方言のインフォーマントとしては適格でないことに気付かれて、失望の色を浮かべられた。

私は沖縄の高等学校2年生の時に、ある事件をきっかけに、愚かにも、学校を止してしまい、良き先生たちの諫める言葉にも耳をかさず沖縄を出奔した。気が狂っていたのである。関西を三年間流浪し、喰うための仕事をしつつ、夜間高校を卒業すると上京した。したがって、言語環境に対して軽薄に順応しやすい私は関西訛りの「標準語」を話していたことと思われる。

学生課の肝煎りで、大学近くのレストランで沖縄県出身学生の夕食会があって、その席で、大学院生の饒平名健爾氏（故人）と比嘉政夫氏に会った。両氏とも社会人類学の専攻で、フィールドは沖縄であった。この夕食会には沖縄出身の学生が7、8人いたような気がするが、なにしろ古い話なのでさだかでない。理学部で物理か科学を専攻していた者が1人いて、自分の専攻分野のことで悩んで留年を繰り返しているとのことで、私はその人の悩みを深刻に受けとめたが、その名がいま思い出せない。図書館へ文芸雑誌や新聞を見に行くと、しばしば饒平名氏と出会った。氏は英語の家庭教師を2、3軒やっているとのことであったが、すでにアメリカ留学の経験もあり、沖縄の高等学校の教諭として数年勤めたことのある老成した方であった。そのころ、中本正智氏の名は八雲丘のキャンパスではまだ聞えなかった。

馬鹿は死ななけりゃ治らないというが、私は性懲りもなく大学もまた途中で止めて2年ほどぶらぶらした。60年安保闘争の挫折感がなおキャンパスに漂っていたころ、私は再入学したが、国文の大学院に沖縄出身者が入ったということを知った。その人が中本正智氏であった。中本氏は沖縄南部の玉城中学校と知念高校では私の1期先輩である。私たちが中学生であったのは1950年頃で、食糧難の時代は敗戦以来続いていて主食は琉球いもであったが、中本氏ら奥武出身の者たちが宇対抗の陸上競技大会の800米、1500米に強いのは、奥武が漁村で日頃魚を食して「クンチ」（持久力）があるからだといわれたものである。中本氏も1500米の選手だったと記憶する。

中本氏が大学院に入学して数年後に、中本氏と同じく琉大を了えた内間直仁氏がやはり国文の大学院に入学した。私は仏文に籍があったが、人文学部の事務室前で時々内間氏と出

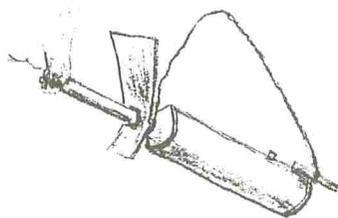
会った。内間氏とどういいうきさつで知り合ったのか思い出せない。同じころ、東京外大のドイツ語科を卒業して、教育学の修士課程に入ってきた平良研一氏とも知り合ったが、平良氏との出会いのいきさつも思い出せない。学生課主催の夕食会が出会いの場だったのかも知れない。

ある年の夏休み明け、私は小田急線の下北沢駅で偶然中本氏と出会った。氏はたくましく日焼けしていて、その精悍な表情が私を打った。氏は夏休みを利用して平山先生と八重山で方言の調査を行い、帰京したばかりであった。氏の顔には研究の鉞脈を発見した若い研究者特有の精気が漲っていた。

その後しばらくして、「沖縄の人で、中本さんという方が語学実験室の助手に採用されたが、君はその人を識っているか」と仏文学の三宅徳嘉先生にきかれたことがある。三宅先生はラボ室の管理責任者になられていたからである。中本氏が国文研究室の助手になる前のことである。

院生のころ、私は中本氏をはじめ、沖縄出身の皆さんとは深いつきあいがなかった。私自身が「沖縄」から遁走したいと願っていたからかも知れぬ。が、中本氏の勉強ぶりは遠くからじっと見ていたような気がする。

(琉球大学教授)



漁火（イチャグワールランプ） カット・中本正智